解誘 三綱行實圖研究

志部昭平

諺解三綱行實圖研究

——本文・校註・翻譯・開題篇——

志部昭平著

江苏工业学院图书馆
藏书章

汲古書院

志部昭平(しぶ しょうへい)

[略歴]
昭和18年(1943)、岡山県の生まれ。昭和42年(1967)岡山大学法文学部文学科卒(言語学)、昭和50年(1975)東京教育大学大学院文学研究科博士課程単位習得退学(言語学)。東洋文庫奨励研究員、東京教育大学文学部助手、国立国語研究所研究員を経て、現在千葉大学文学部助教授。
[専門] 言語学、朝鮮語学。
[著書] に『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所報告、秀英出版、1984)、『コスモス朝和辞典』(共著、白水社、1988) など、[論文] に「中期朝鮮語陳述法語尾小攷」(『朝鮮学報』104、1982)、「乙亥字本楞嚴經諺解について」(『朝鮮学報』106、1983)、「陰德記 高麗詞之事について」(『朝鮮学報』128、1988) などがある。

諺解　三綱行實圖研究　　全2冊

1990年10月31日　発行

著　者　志　部　昭　平
発行者　坂　本　健　彦
印　刷　モリモト印刷株式会社

発行所　汲　古　書　院
〒102 東京都千代田区飯田橋2－5－4
電話 03(265)9764　FAX 03(222)1845

©1990

序

本研究は、中期朝鮮語の最も基本的な散文資料の一つである成宗時初刊版《刪定版諺解三綱行實圖》について、書誌学的文献学的な研究にもとづいて出来るかぎり正確で原本に近いテキストを提示し、これに校勘と言語学的註解および翻訳を加えて中期朝鮮語研究に資することを目的とするものである。

「三綱行實圖」は儒教を国教とする李氏朝鮮朝の教化政策の亀鑑として、儒教の基本的徳目としての「三綱」、すなわち「孝」「忠」「貞」の理想を具現し行いの範となるべき「孝子」「忠臣」「烈女」の行實を中国、及び朝鮮の史書から抜いて編み、これにそれぞれの物語を畫いた「圖」を配してことに庶民に対する教化の便を図ったものである。これにはその後さらに創製直後の訓民正音(1443)をもって「諺解」（朝鮮語訳）が付され李氏朝鮮朝のおおよそ400年の長きにわたって改刊重刻を重ねて国民の倫理を培う規範として大きな役割を果してきたものである。

これらの代表的な刊本としては、

(1)世宗初刊三綱行實圖　1434（世宗16年）
(2)諺文三綱行實列女圖　1481（成宗12年）
(3)刪定諺解三綱行實圖　1490（成宗20年）
(4)宣祖改訳三綱行實圖　1579（宣祖13年）
(5)英祖改訳三綱行實圖　1726（英祖 2年）
(6)五倫行實圖　1797（正祖21年）

などが知られている。(1)は世宗朝に編纂・刊行された漢文からのみなるものであり、(2)は傳本の所在がなく詳細は不明であるが、諺訳された(1)を成宗時に「烈女圖」のみ印出したものと傳えられる。(3)は、(1)の諺訳版を刪定刊行したものと推定され、さらに(4)並びに(5)は、この刪定諺解版の(3)を宣祖時と英祖時にそれぞれ改訳刊行したものである。(6)は、正祖時に(5)と、別に編纂された「二倫行實圖」とを合して、もう一度改訳編纂されたものである。そしてこれらをそれぞれ祖本とした重刻改板は数知れない。またこれらを補うものとして、(3)のいわば続編とも言うべき性格を持つもので、

(7)續三綱行實圖　1514（中宗 9年）
(8)二倫行實圖　1518（中宗13年）
(9)東國新續三綱行實圖　1615（光海君 8年）

などが、同一の目的の目的を持ち、かつ(3)にならってほぼ同一の様式をもって相次いで編纂刊行された。さらに興味深いのはこの三綱行實圖が文禄慶長の役を通じて日本にも傳えられ、(4)を底本とした２種類の和刻本まで存在することである。

これらが如何に読まれたか、については詳らかでないところが多いが漢文で書かれた(1)はおくとして少なくとも朝鮮語で書かれたもので李朝文献史を通じてこれらほど

多く版を重ね、かつ広く読まれたものも稀であろう。

ここに取り上げようとするのは、これらのうち、(3)の成宗版「刪定諺解三綱行實圖」である。この朝鮮語訳が最初にいつ行われたかについては詳らかではないが、これが訓民正音創製後のごく早い時期に成立したものであろうことは、その語学的特徴等から明らかである。中期朝鮮語の資料としてはこれが、

(1)訓民正音創製後ごく初期に成立した蓋然性が高い、
(2)形式的には翻訳ではあるが、漢文の直訳ではなく、いわゆる「諺解体」をとらない数少ない散文資料である、
(3)従ってその朝鮮語は文章語としてしての体裁をよく整えているとは言いがたく、また翻訳も十分練り上げられたものではないが、むしろその故に當時の生に近い朝鮮語の姿をよく反映している、
(4)内容的には、佛典の「諺解」に偏る中期朝鮮語資料のなかにあって、よく日常の生活に密着した内容を持つものであり當時の日常の言語生活をよく伺い知ることが出来る、
(5)朝鮮朝の約400年の間に少なくとも３次にわたる改訳を重ねており、時代の異なるこれらの朝鮮語を略々同一のコンテキストにおいて比較することによって、その変遷のあとをよく辿ることが出来る、

などの点において、その量こそそれほど多いとは言えないにしても中期朝鮮語の代表的散文文献である「釋譜詳節」(1447)や「月印釋譜」(1459)にも比肩し得るほどに言語学的価値の高いものと言わねばならない。しかるに従来一部の学者にその重要性を指摘されながらも、これについての研究は非常に少なく、またそのテキストの調査についてもほとんど手が付けられていないのが現状である。これはひとえに、従来(1)よい傳本の所在が知られていなかったこと、(2)従って信用の出来るテキストの書影による公開と、これに対する書誌学的・文献学的研究が十分には為されていなかったこと、この二点に依るものであろう。本研究はこの欠を補おうとするものである。

筆者は過去６年間にわたって、韓国及び日本に傳存する「三綱行實圖」の調査を続けてきたが、その過程で従来あまり知られていない多くの版本の所在をつきとめることができた。この間に目睹し得た「三綱行實圖」の刊本は、おおよそ80本以上にものぼるが、そのうちここに採り上げる成宗時初刊本系に属する諸本は現在所在不明のものも含めて６種類22本を数える。しかしてこれらはいずれも明確な刊記を持たずまた傳本の多くは破損する。勿論いずれの傳本もすでに原刊本とは言いがたく加えてこれらのテキストは、明らかに版を重ねるに際して生じた多くの錯誤を呈している。本稿はこれらの異本間の校合とその結果にもとづき諸本の系譜を推定、これらのなかで唯一の完本であってしかも、零本しか傳存していない最古本を除くならば、最も原本に近いテキストとして《韓国誠庵古書博物館所蔵内賜本》を比定した。そしてこれを底本として校註等を加えて公刊しようとするものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本書は大きく(1)本文篇、(2)開題篇、(3)索引篇の３篇から構成される。「本文篇」では上述のごとく校訂されたテキストの提示と、それについての註解・通釈・校異などを、「開題篇」では、ここで校訂に用いられた成宗初刊本系諸テキストについての文献学的・言語学的位置付けを行う。さらに「索引篇」では、本文篇のテキストにもとづく索引を、いわゆる「文脈附索引（KWIC）」の形で提供することにする。本研究は以上のごとく本文献についての言語学的研究ではあるが、それ以上に本文献を用いての言語史研究をより十全なものとする為の、文献学的研究に主眼をおくものである。なおもとよりかくのごときテキストの公刊が、その書影をも付してはじめて完全なものとなることは言うまでもない。また編者もこれを切望するところであった。しかして、この度諸般の事情からこれが叶わなかったこと、また原本に付された「圖」並びに「詩賛」をも割愛するところとなったことは、誠に残念である。この公刊は所蔵者の御厚意のもとに筆者が閲覧・筆写することを得た資料にもとづくものである。公刊に當たっては校正には与うかぎりの努力をしたつもりであるがなお遺漏あることをおそれる。これが契機となって近い将来より原本に近い異本の発見が為されること、また加之これが書影の形で公開されることをここに切望するものである。

［謝　辞］

この度の５次にわたる韓国及び国内での文献調査に當っては、内外の多くの研究者、また図書館関係者に随分お世話になった。ことに底本の閲覧、筆写、並びにこのような形での公開を許可し研究上のあらゆる便宜を計ってくださった、

韓国誠庵古書博物館長　趙炳舜氏

また調査・研究にわたって終始適切な御助言と励ましを惜しまれなかった、

韓国ソウル大学校教授　安秉禧氏

韓国檀國大学校教授　南豊鉉氏

東京外国語大学教授　菅野裕臣氏

富山大学教授　藤本幸夫氏

さらに貴重な文献を快く閲覧ならびに複写することを許された、

韓国百済文化研究院長　李崇寧氏

韓国釜山大学校教授　柳鐸一氏

韓国通文館　李謙魯氏

米国在住　金杰氏

加えて、いちいち御尊名は挙げないが、韓国高麗大学校中央図書館、同ソウル大学校中央図書館奎章閣、同嶺南大学校中央図書館、同啓明大学校中央図書館、同延世大学校中央図書館、同成均館大学校図書館、同国立中央図書館、東京大学附属図書館、同法学部法政史資料室、同文学部図書館、駒澤大学中央図書館、国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、早稲田大学中央図書館、京都府立総合資料館、大阪府立中之島図書館、天理大学附属天理図書館、東洋文庫、尊経閣文庫、大東急記念文庫、お茶の水図書館、などの図書館並びに関係者各位に、ここに紙面を借りて心から御礼を申し上げる次第である。ことに高麗大学図書館の御厚意には感謝する。

なおこのテキストの中期朝鮮語の印字、並びに文脈附索引等の作成に當ってはパソコン（NEC PC-9801VM）を利用した。これらのプログラム作成に當っては全面的に明海大学専任講師福井玲氏の御助力をお願いした。印字並びにKWIC作成プログラム(福井 1989)の利用を許諾、加之さまざまの面倒な注文に応じて下さった氏に心より感謝するものである。なお印字はレーザプリンタ（NEC PC-PR406LM）による。

本書の刊行に當っては、汲古書院への御推輓を忝うした東洋文庫理事長北村甫先生、畏友国立民族学博物館助教授長野泰彦氏に、また、このような採算のとれない出版を快諾下さり、心のこもった造本を頂いた汲古書院社長坂本健彦氏の御厚情に感謝したく思う。刊行には、図らずも平成２年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。関係者各位の御高配に感謝する。

最後に私事に亙ることを許されるなら、尽きせぬ学恩を蒙り公私に亙って常に温かくまた厳しいお励ましと御鞭撻を頂いた恩師 故江實先生、河野六郎先生に拙ないものではあるが本書を捧げたい。

平成２年７月日　　志部昭平

□ 総目次

［上巻］

□序 …… 001

□第１篇 諺解三綱行實圖本文（校註・通釋） …… 011

【凡　例】 …… 013
第1章 三綱行實圖孝子圖目録及び本文 …… 019
第2章 三綱行實圖忠臣圖目録及び本文 …… 121
第3章 三綱行實圖烈女圖目録及び本文 …… 247

□第２篇 諺解三綱行實圖開題 …… 359

第1章 李氏朝鮮の教化教育と三綱行實圖 …… 361
第2章 諺解三綱行實圖の傳本とその系譜 …… 383
第3章 諺解三綱行實圖の成立について …… 424
第4章 内容的特徴から見た諺解の成立 …… 431
第5章 三綱行實圖の資料的性格と価値 …… 460
【附記】本文校勘と底本について …… 462
【註】 …… 464

□附　録 …… 479
【三綱行實圖序，教旨，箋，跋】 …… 481
【三綱行實圖関係記事年表】 …… 484
【引用及び参考文献一覧】 …… 497
【影印等資料文献一覧】 …… 502

［下巻］

□第３篇 諺解三綱行實圖文脈附索引

【凡　例】 …… 001
第1部 諺解三綱行實圖 語幹文脈附索引 …… 007
第2部 諺解三綱行實圖 語尾接尾辞文脈附索引 …… 289
□補　遺 諺解三綱行實圖 語尾接尾辞一覧 …… 583

□ 図版目次

[口絵]		誠庵古書博物館所蔵内賜本	
[図版 1]	世宗漢文版	高麗大学校中央図書館所蔵本	369
[図版 2]	<T1>	誠庵古書博物館所蔵内賜本	372
[図版 3]	<T1a>	金泳仲氏所蔵嶺南某郷校本	373
[図版 4]	<T2>	誠庵古書博物館所蔵盈徳郷校本	374
[図版 5]	<T3>	高麗大学校中央図書館所蔵本	375
[図版 6]	<T4>	駒澤大学中央図書館所蔵本	376
[図版 7]	<T5>	高麗大学校中央図書館所蔵本	377
[図版 8]	宣祖改訳版	東京大学附属図書館所蔵本	378
[図版 9]	英祖改訳版	高麗大学校中央図書館所蔵本	379
[図版10]	五倫行實版	東京大学附属図書館所蔵本	380
[図版11]		<T1>における補刻部分	387
[図版12]		<T1>における補刻部分	388
[図版13]		<T3>における補刻部分	399
[図版14]		<T4>における補板部分	402
[図版15]		<T4>谷城刻を示す部分	408
[図版16]		<T5>における補板部分	411
[図版17]		諸版の内題部分の比較	419
[図版18]	孝順事實	お茶の水図書館所蔵本	468
[図版19]	古今列女傳	大東急記念文庫所蔵本	468
[図版20]	帝鑑圖説	国立国会図書館所蔵本	469
[図版21]	禮記大文	京都府立総合資料館所蔵本	469

[表 1]	李氏朝鮮における教化類の刊行と三綱行實圖	364
[表 2]	世宗漢文版と刪定諺解版の比較	384
[表 3]	諺解三綱行實圖傳本一覧	416
[表 4]	諺解三綱行實圖版式等比較表	418
[表 5]	諸版における錯誤の傳承(1)	421
[表 6]	諸版における錯誤の傳承(2)	422
[表 7]	諸版における衍文の傳承	422
[表 8]	傳存諸版とその系譜	423
[表 9]	中期朝鮮語における２類の連用形	441
[表10]	15世紀文献の表記特徴と三綱行實圖	444
[表11]	孝子圖におけるアクセントの錯誤表	452

□朝鮮語文献資料略号一覧

本稿で用いられた朝鮮語史の資料とその略号は次の通りである。数字は巻数及び張数を、abは張数のそれぞれ表裏を表す。またABCは巻のそれぞれ上中下を表すことにする。刊年は原刊本にもとづき、原則として安秉禧(1972)に従うが、私見によって改めたところもある。また使用されたこれらの影印等文献資料については巻末の【影印等文献資料一覧】に掲げる。書名右肩の*記号はこれが原本としては傳存しないことを示す。

○世宗	[龍歌]		龍飛御天歌(1447) [1～10]
	[訓民]		訓民正音解例(1447)
	[釋譜]	<活>	釋譜詳節(1447) [3,6,9,11,13,19,23,24]
	[月曲]	<活>	月印千江之曲(1447) [A]
	[東國]		東國正韻(1448) [1～5]
	[舍利]	<活>	舍利靈應記(1449)
○世祖	[訓諺]		訓民正音諺解(1451-59)
	[月印]		月印釋譜(1459) [1,2,7～17,21,22,23]
	[蒙山]		蒙山和尚法語略録(1459-60)
	[阿彌]	<活>	阿彌陀經(1459-60)
	[楞嚴]	<活>	楞嚴經(1461) [1,2,5,6,7,8,9,10]
	[楞嚴]		楞嚴經(1462) [1～10]
	[法華]		法華經(1463) [1～8]
	[永嘉]		禪宗永嘉集(1464) [A,B]
	[阿彌]		阿彌陀經*(1464)
	[金剛]		金剛般若波羅密經(1464) [A,B]
	[心經]		般若波羅密多心經(1464)
	[御牒]	<写>	五臺山上院寺御牒・同重創勸善文(1464)
	[圓覺]		圓覺經(1465) [1～10]
	[救急]	<活>	救急方*(1466) [A,B]
	[牧牛]		牧牛子修心訣(1467)
	[法語]		四法語(1467)
○成宗	[内訓]	<活>	内訓*(1475) [1,2A,2B,3]
	[杜詩]	<活>	分類杜工部詩(1481) [3,6～11,14～17,19～25]
	[金三]	<活>	金剛經三家解(1482) [1～5]
	[南明]	<活>	南明集(1482) [A,B]
	[觀音]	<活>	觀音經(1485)
	[靈驗]	<活>	靈驗略抄(1485)
	[随求]		随求陀羅尼(14--?)
	[救簡]	<活>	救急簡易方*(1489) [1,2]
	[三綱]		三綱行實圖*(1490)
	[伊路]		伊路波(1492)

	[樂學]		樂學軌範(1493) [1～9]
○燕山君	[六祖]	<木活>	六祖法寶壇經(1496) [A,B]
	[眞言]	<木活>	眞言勸供(1496)
	[施食]	<木活>	三壇施食文(1496)
○中宗	[續三]		續三綱行實圖*(1514)
	[翻老]	<活>	翻譯老乞大*(15--?) [A,B]
	[翻朴]	<活>	翻譯朴通事(15--?) [A]
	[老朴]	<活>	老朴集覽(15--?)
	[翻小]	<活>	翻譯小學*(1517) [6～10]
	[四聲]	<活>	四聲通解*(1517)
	[二倫]		二倫行實圖(1518)
	[呂氏]	<活>	呂氏鄉約(1518)
	[正俗]	<活>	正俗諺解*(1518)
	[別行]		法集別行錄節要諺解(1522)
	[簡辟]	<活>	簡易辟瘟方(1524)
	[訓蒙]	<活>	訓蒙字會(1527) [A,B,C]
	[村家]		村家救急方*(1538)
	[牛馬]	<活>	牛馬羊猪染疫病治療方(1541)
	[分門]	<活>	分門瘟疫易解方(1542)
○明宗	[父母]		父母恩重經*(1553)
	[救荒]	<活>	救荒撮要*(1556)
	[聖觀]		聖觀自在求修禪定(1560)
	[百聯]		百聯抄解(1563)
○宣祖	[禪家]		禪家龜鑑*(1569) [A,B]
	[七大]		七大萬法(1569)
	[念佛]		念佛作法(1572)
	[光千]		光州千字文(1575)
	[新類]		新增類合(1576) [A,B]
	[誡初]		誡初心學人文(1577)
	[發心]		發心修行章(1577)
	[野雲]		野雲自警序(1577)
	[重警]		重刊警民編(1579)
	[石千]		石峰千字文(1583)
	[宣祖版]		宣祖改譯三綱行實圖(1579-80)
	[宣祖版]		宣祖改譯續三綱行實圖(1579-80)
	[宣祖版]		宣祖改譯二倫行實圖(1579-80)
	[小學]	<活>	小學諺解(1587) [1～6]
	[孝經]	<活>	孝經諺解(1589)
	[大學]	<活>	大學諺解(1590)
	[中庸]	<活>	中庸諺解(1590)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

	[論語]	<活>	論語諺解(1590) [1～4]
	[孟子]	<活>	孟子諺解(1590) [1～14]
○17C	[新續]		東國新續三綱行實(1615)
以降	[高麗]		陰徳記高麗詞之事(16--?)
	[捷解]	<活>	捷解新語(1676) [1～10]
	[英祖版]		英祖改譯三綱行實圖(1726-30)
	[英祖版]		英祖改譯二倫行實圖(1726-30)
	[英祖版]		英祖改譯續三綱行實圖(1726-30)
	[五倫]	<活>	五倫行實圖(1797) [1～5]

□その他の略号一覧

本稿の【校註】などで用いられた略号は次の通りである。なお、(1)本稿で用いた文法用語については概ね志部(1987)、河野(1952)に従う。(2)用言の活用語基ⅠⅡⅢⅣⅤについては河野(1955)に従う。(3)用言及び体言の語根√の立て方については、それぞれ本文篇の註§106.19、§107.15 を参照されたい。

[動]	動　詞	ⅠⅡⅢⅣⅤ	用言活用語基
[形]	形容詞	＋	接尾辞・語尾結合
[存]	存在詞	+	語幹派生結合
[指]	指定詞	=	分離用言結合
[名]	名　詞	<>	漢字語
[副]	副　詞	{}	文字表記
[数]	数　詞	／	交替形
[連]	連体詞	√	語幹・語根
[他]	他動詞		
[自]	自動詞	#	用　例
[受]	受身形	《》	校勘の典拠など
[使]	使役形	§	註釈箇所
[主]	主　格	●	主要文法説明項目
[対]	対　格	▽	[図版]参照
[属]	属　格		
[処]	処　格		
[与]	与　格		
[奪]	奪　格		
[従]	従　格		
[共]	共同格		
[呼]	呼　格		
[尊]	尊　称		
[平]	平　称		

第 1 篇

諺解 三綱行實圖本文

校註と翻譯

□校註 諺解三綱行實圖 凡例

1. 本篇は、成宗初刊版《刪定版諺解三綱行實圖》における朝鮮語テキストの校勘と復原さらにそれについての註解並びに通釈を目的として編まれたものである。

2. 本篇の「底本」としたテキストは《誠庵古書博物館所蔵内賜本》<T1>である。これを底本とする理由等については「開題篇」(§5.2) を参照されたい。

3. 本篇はテキストの翻字、すなわち【本文】とそれに対する【校註】、【通釈】さらに【原文】、【参考】とから構成される。

4. 【本文】について

4.1 テキストの提示に當っては、「底本」のテキストが書影公開できない現状に鑑みて
①底本を出来るだけ忠実に提示すること、
②これに校勘を加えて出来るだけ原本に近い姿を復原すること、
この2点を方針とした。

4.2 「本文」は「底本」となったテキストにおける以下の錯誤についてのみ改めることにした。
①漢字表記語に付けられた、いわゆる「東國正韻式漢字音」の錯誤については一部の例外を除いて『東國正韻』に基づいて改めた。ただしアクセントは底本のままに従う。
②「底本」について、傳本の過程で生じたと推定される、刷りが悪くて不明であったり脱画があったりする部分、明らかな誤刻等、また破損部分などについては諸本との校合により復原した。
③「底本」における漢字の異体字、略体字などについては印刷の都合上原則として正字に改めた。

4.3 「底本」のこれら以外の錯誤については明らかな原本の錯誤と思われるものをも含めて「底本」のままとし、上の改めたり復原したりした部分については「本文」の當該箇所に[]に囲んで「底本」の形を示した。ただし「底本」の刷りの悪さによって生じたと見られる欠画脱画の類は省略に従う。

4.4 「本文」はアクセント表示(声点)についても「底本」のままに従い、これが明らかな錯誤であっても一切改めないこととした。

4.5 以上によってこの「本文」は[]で補った部分を含めればほぼ完全に「底本」の状態

に戻ることが可能である。

4.6 諸本の校合等による《朝鮮語テキストの校訂及びその結果》については「本文」に附された【校註】によって示される。従って、これが厳密な意味での編者の考える校訂本となる。

4.7 「本文」の翻字と排列に當たっては出来るだけ「底本」のとおりとし、1行の配字数なども「底本」のままとしたが、次の点では改めた。

①単語の切れ目にスペースを設けた。これは編者の解釈に依る。

②「底本」における「割註」は印刷の都合上、割らないで続け【】で示した。

4.8 「底本」における欠字、あるいは刷り落しの文字は□記号(白抜き)で示した。また「底本」の破損部分もこれに従う。

5. 【本文】のコードについて

「本文」の各行頭には、本文あるは底本の必要部分を検索あるいは指示するために次のような6桁のコード番号を付した。

①第1桁目の数字はそれぞれ、**1** は「孝子圖」、**2** は「忠臣圖」、**3** は「烈女圖」であることを、

②第2、3桁目の数字は、それぞれの「行實」のコード、すなわち、その張数を、

③第4桁目の **ab** は、それぞれその張次の表裏を、

④第5、6桁目の数字は、それらの行番号を、

表すものとする。従ってたとえば「コード 101a01...」とあれば、當該箇所が底本の「三綱行實孝子圖第1張の表第1行目」にあることを示す。

6. 【校註】について

6.1 校勘は諸本との校合の上、「底本」の錯誤ついて行った。その際、

①まず、諸本との校合により、

②次いで、本テキスト内部での内的根拠により、

③さらに、同時代の資料による外的根拠により、

行うものとした。原文の成立とそれを如何なるものとして復原すべきかについては「開題篇」の【附記】で私見を述べる(p.462)。

6.2 校勘を行い復原された形には、校註の番号の右肩に*を附し、さらにその典拠あるいは参考とした資料、用例等を《》のなかに示した。なお『東國正韻』からの漢字音の引用に當っては、母音音節字音末の「喩母」字は一切省略することにした。

6.3 校勘と復原、または註釈に當たって用いられた《刪定諺解三綱行實圖》の諸本とその略号とは次のごとくである。諸異本の書誌及び言語学的特徴等の詳細については「開

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com